

even art project を通した社会連携と教育的効果の研究

—5年の活動を通じて—

SOCIAL COOPERATION AND EDUCATIONAL EFFECT IN THE “EVEN ART PROJECT” A review of five years activities

見寺 貞子	デザイン学部ファッションデザイン学科 教授
かわい ひろゆき	デザイン学部ビジュアルデザイン学科 教授
谷口 文保	先端芸術学部クラフト・美術学科 講師
柊 伸江	芸術工学研究所 研究員
韓 先林	元・デザイン学部ファッションデザイン学科 実習助手
.....	
Sadako MITERA	Department of Fashion and Textile Design, School of Design, Professor
Hiroyuki KAWAI	Department of Visual Design, School of Design, Professor
Fumiyasu TANIGUCHI	Department of Crafts and Arts, School of Progressive Arts, Assistant Professor
Nobue HIIRAGI	Research Institute of Arts and Design, Researcher
Sun Rim HAN	Department of Fashion and Textile Design, School of Design, Former Assistant

要旨

ファッションデザイン学科の有志学生と教員を中心に、2005年度に設立した「even art project」も、活動5年目を迎えた。毎年、even（平らな、平等の）をキーワードに新しいユニバーサルデザインについて考え、活動してきた。

2009年度は、みつくすさいだープロジェクト、えびすアートプロジェクト、ちびたんプロジェクト、神戸クリスマスプロジェクトを行い、ものづくりからコトづくり、コミュニケーションデザインにまで広がる実験的活動を行った。本研究は、ものづくりでは学生の感性や創造力、クリエイティブティを養い、コトづくりでは学生らのリーダーシップの育成や、大学の地域貢献を実践してきた。

本報告では、2009年度の活動を振り返るとともに、5年の活動を通じて見えてきた社会連携と教育的効果について報告する。

Summary

The Even Art Project that establishes mainly the school personnel and the student of the Fashion Design Department in 2005 also received the fifth year of the activity. We think about the new universal design that makes "even" key word, and have acted every year.

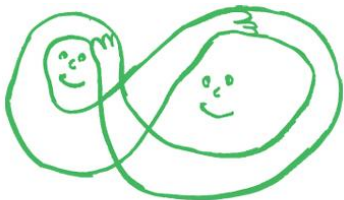
In 2009, we did the project, such as “Mixsider project”, “Ebisu-art-project”, “Chibitan project”, and “Kobe Christmas project”. We did the experimental activity that extended from object design to situation design and communication design. This study has supported student's sensibility and creativity in object design, and has practiced a promotion of students' leadership and a regional contribution of the university in situation design.

In this report, it looks back on the activity in year 2009, and describes social cooperation and an educational effect that comes into view through activity of five years.

1) はじめに

阪神淡路大震災の10年目である2005年5月、ユニバーサルデザインを学生の視点から考えるプロジェクト・even art project(イーブンアートプロジェクト:以下 eap とする)が設立された。eap は、神戸芸術工科大学ファッションデザイン学科の有志教員と学生たち約50名が始めたデザイン&アート集団である。even とは、「平らな」「対等の」を意味し、デザインやアートを通じて身近な人に心地よさを届けるというコンセプトのもと、作品制作やワークショップ、ファッションショーなど、様々な活動を行った。これまでの活動については、神戸芸術工科大学紀要2006、2007、2008、2009に掲載しているので、ご参照いただきたい。(図1、2)

本報は、2009年度に行った活動(みつくすさいだープロジェクト、えびすアートプロジェクト、ちびたんプロジェクト、神戸クリスマスプロジェクト)を紹介するとともに、5年の活動を通じて見えてきた社会連携と教育的効果について整理し、これまでの eap 活動の総まとめを行う報告とする。



even art project
イーブン・アート・プロジェクト

図1) even art project のロゴマーク

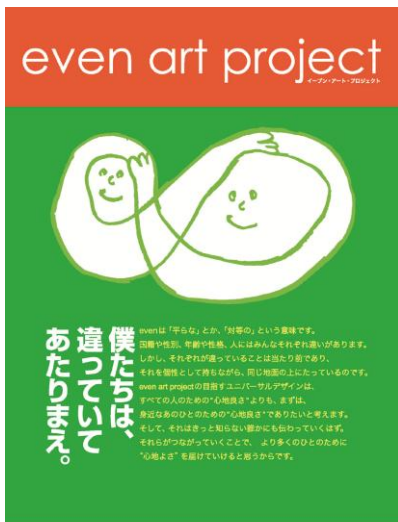


図2) even art project を紹介するポスター

2) みつくすさいだーとえびすアート

eap から生まれた活動のひとつに「みつくすさいだー」プロジェクトがある。知的障がい者の描く絵を原画に学生がデザインアレンジ、商品化を行い、売上の一部を原画作者に還元している。ネーミングはアウトサイダーアートをデザインにミックスするという意味の造語。

「えびすアートプロジェクト」はアートとまちづくりをつなぐ地域活動である。知的障がい者を中心とする福祉作業所「NPO 法人えびす」の協力の下、利用者の描いた絵を原画に学生と教員が絵画やオブジェを制作し、作業所とアーティストの連携による地域参加や商品企画の可能性を提案している。

2009年6月27日～7月7日、アートホール神戸にて「MIX-交差するアートとデザイナー」展が開催された。えびす利用者の絵をアートとして展開し、エプロンとして商品化する実験的取り組みであった。(図3、写真1)

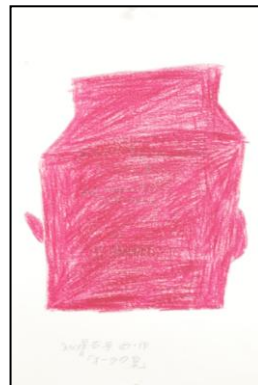


図3) 原画

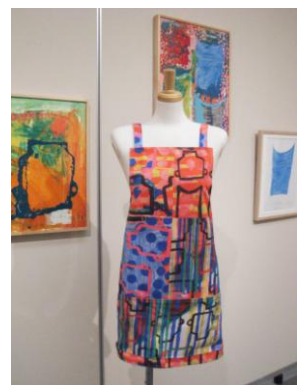


写真1) アート作品とエプロン

また、9月にはみつくすさいだーの学生がえびすを訪れ、エプロンのお披露目と利用者との交流を行い、完成したエプロンをえびす食堂に展示した。(写真2)



写真2) えびす食堂での展示の様子

3) ちびたん

「ちびたん」プロジェクトもまた、eap から生まれた活動のひとつで、親子が服作りを通してコミュニケーションを図ることを目的に 2006 年に設立された。

結成 4 年目の活動は 2009 年 8 月 10 日・11 日・12 日の 3 日間、神戸市立明親小学校にて、「親子でおそろい手作り服を楽しもう！」という服作りワークショップを実施した。（協力：神戸市地域子育て支援センター兵庫、ボランティア保育士の方々）参加対象者は 0 才～4 才児を持つ親子で、女の子と母親はエプロンドレス、男の子は短パンと T シャツを制作した。ミシンの使い方や制作手順、デザインアレンジのアドバイスには、母親ひとりに対し学生 2 名がサポートについた。また、制作場所の隣に保育場を設け、母親が安心して服作りに専念できるよう配慮した。（写真 3、4）



写真 3) 作業の様子



写真 4) 完成品と作者親子

完成した親子のおそろい服は、2009 年 11 月 2 日、兵庫公会堂で行われたユニバーサルデザインファッションショーで発表した。（写真 5）



写真 5) ファッションショーの様子

4) 神戸クリスマス

ルミナリエが終わった後も神戸の街ににぎわいを作りたい。そんな思いをきっかけに、クリスマスを迎える神戸の街を盛り上げようと、2009 年 10 月、「神戸クリスマス・ハグサンタ」プロジェクトが始動した。トナカイやハート、星形など計 5 体の着ぐるみを制作。キャラクターデザインをビジュアルデザイン学科学生が担当（図 4、5）、実物制作をファッションデザイン学科学生が担当した。ハグしやすい形状や素材にこだわり、ボア、キルティングなど肌触りのよい生地を選び、形を保つため断熱シートを使うなどして工夫した。



図 4) ホッシー



図 5) ハートン

完成した作品は、2009 年 12 月 23 日、西神中央駅周辺施設での共同企画「サンタが街にやってくる!? 着ぐるみキャラクターとふれあい会」で披露した。集まった子供たちはキャラクターの外見としぐさに夢中になり、握手や撮影会を楽しんだ。12 月 23 日・24 日には JR 三ノ宮駅前広場にて街頭パフォーマンスを行った。制作担当の学生は「子供はもちろん、疲れている大人たちにも、ハグを通じて温かい気持ちになってほしい」と話し、親子連れやカップル、お年寄りまで、たくさんの人とハグで温もりを分かち合った。（写真 6、7）



写真 6、7) 三ノ宮での街頭パフォーマンスの様子

5) eap 世代間交流会

eapの卒業生が社会に進出していく中、年に一度、情報交換や近況報告を行う場を作りたいという思いから、「eap世代間交流会」を2008年度から行っている。eapの活動報告に加え、様々な分野からゲストを招き、デザインと社会、アートと社会の接点を考える機会を提供している。第1回eap世代間交流会は、2009年2月28日（土）14時～17時、神戸芸術工科大学クリエイティブセンターにて開催。第2回eap世代間交流会は、2010年2月13日（土）13時～15時、神戸市灘区にあるBBプラザ会議室で開催した。（写真8）



写真8) 第2回eap世代間交流会の様子

6) 5年間の活動を通じて

2005年に始まった even art project も、毎年、新たな学生を迎えて組織の新陳代謝を繰り返し、5年にわたり活動を続けてきた。当初はファッションデザインが中心だったプログラムも、アートやパフォーマンスにまで活動の幅を広げた。eap から生まれたプロジェクトに共通する特徴は、どのプロジェクトも社会と連携しているということである。プロジェクトを推進する上で大切なことは、一方的な支援ではなく、両者が一緒に楽しむことである。それぞれのプロジェクトは社会と連携し、その活動で得たノウハウが eap に蓄積され、eap という場はさらに大きく拡大、拡散していく。

eap の活動は、年齢や性別、障害のあるなしを超えたコミュニケーションの場であり、学生の感性やリーダーシップの育成を図る貴重な実践教育の場であった。ものづ

くりから始まりコトづくり、人づくりへとつながる私たちの活動は、大学だから出来る活動であり、大学がやらなければならない重要な役割の一つである。

全ての人が快適に感じるデザインとは、一見、完璧なデザインのようにも思えるが、実は対象が曖昧でゴールが見えにくい。私たちは活動当初から、ユニバーサルデザインという言葉をあえて用いず、“even”という言葉を用いた。eap における“even”とは、等分に分けるという意味ではなく、それぞれの能力を活かして互いに協力し合い、プロジェクトを推進していくという意味を含む。この精神こそが私たちのプロジェクトの幅をここまで広げ、結果的に、広義のユニバーサルデザインという新しい価値を社会に提言できたのではないかと考える。

一般的なプロジェクトはミッションを達成すれば終わるが、eap は終わりのないプロジェクトである。それは、実践を通して新たなミッションが発見されたり、新しいつながりができたりするからだ。私たちは5年の活動を通して、eap という活動の奥深さと今後の可能性を改めて感じた。eap から生まれたプロジェクトはこれからも発展し続け、社会に広がり、次の世代に継承されていく。

最後に、eap の活動にご協力をいただいた NPO 法人えびす、神戸市地域子育て支援センター兵庫、ボランティア保育士の方々、各プロジェクトに参加していただいた方々、その他多くの皆様に感謝の意を表す。

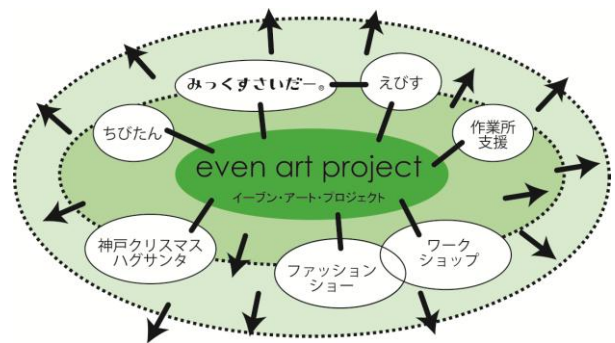


図6) even art projectのイメージ図

※共同研究分担者

安田 雅子（デザイン学部ファッションデザイン学科教授）、瀬能 徹（デザイン学部ファッションデザイン学科 准教授）